

# 新学習指導要領で 求められる 学習評価の本質と その実践の要諦

京都大学大学院 教育学研究科 教授  
**西岡加名恵**

新学習指導要領で改善が求められている学習評価、特に観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の充実は、生徒の学習にどのような影響をもたらすのか。2022年度入学生を迎えるにあたって押さえておくべきポイントを、教育評価を専門とする研究者が解説する。

京都大学大学院  
教育学研究科 教授  
**西岡加名恵**

にしおか・かなえ

専門は教育方法学（カリキュラム論、教育評論）。文部科学省「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」委員などを歴任。著書に『教科と総合学習のカリキュラム設計…パフォーマンス評価をどう活かすか』（図書文化）、編著に『高等学校教科と探究の新しい学習評価』（学事出版）など、多数。



## 1 新学習指導要領における学習評価

「深い理解」を評価し、  
生徒の学びの意欲を高める

新学習指導要領について、先生方とまず確認したいのは、大きく転換した目標観です。これまで、

知識・技能は、個別のものとして習得される傾向がありました。しかし、これからは、知識・技能を互いに関連づけたり、構造化したりしながら深く理解し、実社会で使いこなせるものとして習得する

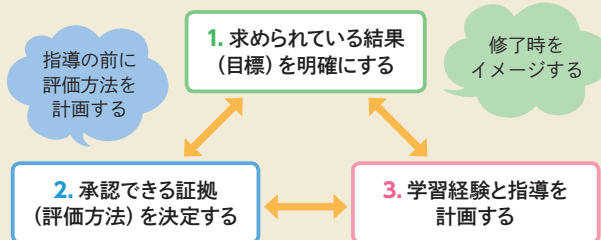
ことを目標としています。つまり、知識・技能を使う時に必要な思考力・判断力・表現力の育成が目指されています。

そのため、新学習指導要領では、そうした目標観の転換に伴う評価観の転換も求められていると言えます。それがすなわち、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点での評価です。

この観点別評価は、自動車の運

転免許の取得の過程で考えるとイメージしやすいと思います。交通规则や運転マナー等の知識の習得はペーパーテスト等で、基本的な運転技術の習得状況は教習所内での教習で評価しますが、学んだ知識や技能を使いこなす運転ができるかどうかは、実際に路上に出て運転する路上検定で評価します。そのように、知識・技能の習得状況はペーパーテストで、思考力・判断力・表現力の発揮は複数

図1 「逆向き設計」の3つの段階



※ Grant・ウィギンズ、ジェイ・マクタイ『理解をもたらすカリキュラム設計』（日本標準）の内容を基に西岡教授が作成。

の知識や技能を総合して使いこなすことを求めるパフォーマンス課題で評価するというように、観点ごとに多様な方法で評価するのが観点別評価です。

観点別評価を充実させるためには、どのような目標に対してどの評価方法を用いるのかを明確にすることが求められます。そして、目標と評価方法の対応を考える上で参考になるのが、「逆向き設計」(図1)です。これまで、評価方法は、指導が終わった後で検討されがちでしたが、単元末や学年末・卒業時などにおける指導のねらいが達成された状態からさかの

## 2 様々な方法で生徒を評価

多様な評価方法を  
使いこなして3観点を評価

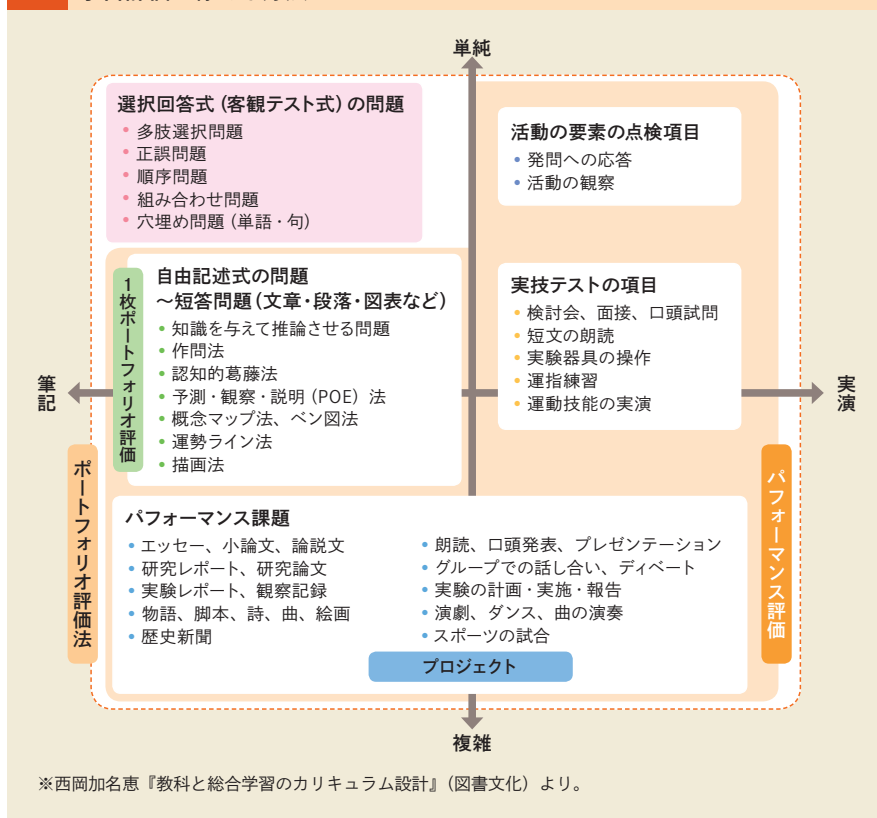
資質・能力を、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点でバランスよく評価するためには、様々な

ぼり、指導計画と評価方法を指導の前段階で構想しておくという考え方です。「実践事例3」福岡県立香椎高校(P.14~17)は、年間指導計画で目標、指導、評価を年度当初に一体的に計画し、年度末に教師同士の対話によって振り返りを行っています。目標に合わせた指導と評価を実施する同校では、生徒は「何ができるようにしているのか」を授業でも評価でも実感しやすく、学びの意欲も向上しやすいはずです。観点別評価の充実には、学習者である生徒にとっても大きなメリットをもたらすのです。

な評価方法を多面的に活用することが求められます。

図2は、評価方法を単純なもの・複雑なものという縦軸、筆記による評価と実演による評価という横軸で整理したものです。この中で、様々な知識やスキルを総合

図2 学習評価の様々な方法



して使いこなすことを求めるような複雑な課題を「パフォーマンス課題」と言います。小論文やレポート、グループでの話し合いや発表、実験の計画・実施・報告などがパフォーマンス課題にあたります。なお、「パフォーマンス評

価」という言葉がありますが、それは知識やスキルを状況において使いこなすことを求めるような評価方法の総称で、客観テスト以外のすべての評価方法を含みます。パフォーマンス課題はパフォーマンス評価の方法の1つです。

図3 3観点と評価方法の対応例

観点	評価方法	
	教科学習	総合探究を 始めとする 探究学習
知識・技能	筆記テスト/実技テスト 【評価規準】チェックリスト	ポートフォリオ 評価法
思考・判断・表現		
主体的に学習に 取り組む態度	パフォーマンス課題 【評価規準】ルーブリック	

※西岡教授への取材を基に編集部で作成。

ポートフォリオ評価法は、学習者の作品や自己評価の記録、教師の指導と評価の記録などをファイルなどに系統的に蓄積したものの（ポートフォリオ）を基にした評価のことで、ポートフォリオ作りを通して、生徒は学習のあり方を自己評価することができ、教師は生徒の学習活動の記録と照らし合わせながら、自身の教育活動を評価することができます。

どの観点をどのような方法で評価するのか、前述の「逆向き設計」の考え方で検討します。知識や技能の習得を確認するには筆記テストや実技テストが有効ですが、知識や技能の「深い理解」の獲得を支援し、評価するためには、パフォーマンス課題に取り組みさせることが必須だと考えます。また、

### 3 パフォーマンス課題とは

様々な知識やスキルの  
総合・活用を求める課題

観点別評価では、どのような目標に対して、どの評価方法を用いるかの検討が欠かせません。前述の「逆向き設計」では、カリキュラムの中核に位置するような本質的な重点目標と副次的な目標とを「知の構造」として区別しながら、評価方法との対応関係を示していきます（図4）。

「知の構造」において、最も低次に位置するのが「事実的知識」

「総合的な探究の時間」のように、生徒自身が課題を設定し、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行い、さらに課題を設定し直すというサイクルを回していく活動については、ポートフォリオ評価法で、学びの中での生徒の変化を見取っていくとよいでしょう（図3）。

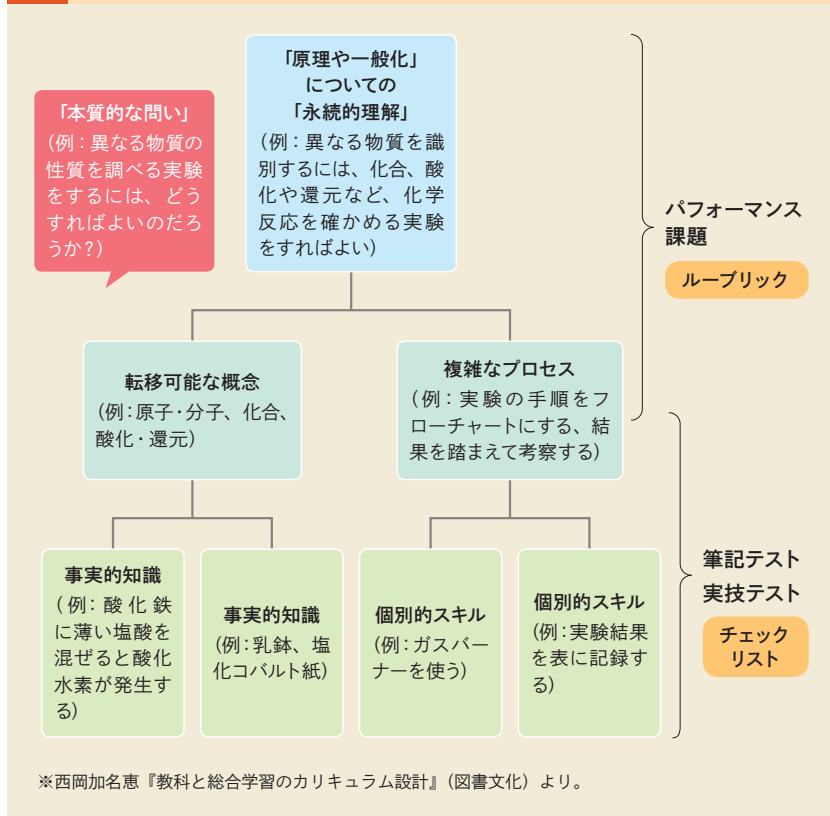
と「個別的技能」です。「事実的知識」と「個別的技能」は、授業で扱うべきものですが、それだけでは生きて働く学力とはなりません。それらより高次に位置するのが「転移可能な概念」と「複雑なプロセス」です。「転移可能な概念」とは、様々な状況で使えるような概念で、「複雑なプロセス」とは、様々な情報を総合するような手続き的知識です。さらに、「転移可能な概念」と「複雑なプロセス」を総合したものととして、「原理や一般化」についての「永

続的理解」が位置づけられます。「原理や一般化」についての「永続的理解」は、将来、学習内容の詳細を忘れても身につけておいてほしいものであり、新学習指導要領における「各教科・科目等の特質に応じた見方・考え方」に通じるものです。

「転移可能な概念」「複雑なプロセス」を総合して得られるような、「原理や一般化」についての「永続的理解」の評価にふさわしい方法が、パフォーマンス課題です。パフォーマンス課題は、様々な知識やスキルを総合してレポートなどを作成したり、プレゼンテーションなどの実演に取り組みさせたりするのに適した単元で設定します。場合によっては、複数の小さな単元を組み合わせ、少し大きな単元でパフォーマンス課題を設定することもあてはまいます。

図4では理科を例に「知の構造」を示していますが、高次な知識・スキルである「転移可能な概念」や「複雑なプロセス」を評価するために、「原子・分子、化合、酸化・還元といった概念について説明す

図4 「知の構造」と評価方法・評価基準の対応



る」「実験の手順をフローチャートにする」「実験結果を踏まえて考察する」といった自由記述式問題が考えられます。さらに、「原理や一般化」についての「永続的理解」という重点目標に対応させると、異なる物質を識別するための実験を計画・実施・報告させる

といったパフォーマンス課題が考えられます。「原理や一般化」についての「永続的理解」を見極めるために、「逆向き設計」では、「本質的な問い」を明確にしておくことを提案しています。「本質的な問い」は、教科の中核に位置する問いであるの

と同時に、生活との関連から学ぶ意義が見えてくるような問いです。「 $\sim$ とは何か?」と概念理解を尋ねたり、「 $\sim$ するにはどうすればよいか?」と方法論を尋ねたりする「本質的な問い」を生徒に問うことで、個々の知識やスキルが関連づけられ、統合されて、「永続的理解」へと至ることができるよう。

### 「真正な評価」によって 生徒の学びの姿勢が変わる

パフォーマンス課題は、学んだことを現実の状況で生きて働くものとして発揮できるかを評価するものです。リアルな、つまり「真正性」の高い評価方法を学校での評価に持ち込むことで、生徒は学習の意義と成果を実感しやすくなります。「パフォーマンス課題を取り入れるようになって、授業に対する生徒の集中力が高まった」「教科書をよく読むようになった」といった声を現場の先生方から聞くことがあります。それは、パフォーマンス課題に取り組むこと

で、生徒が考えながら授業に臨むことの大切さを実感しているからでしょう。「実践事例2」宮城県仙台第三高校(P.10～13)では、パフォーマンス課題に取り組んだ後、生徒が「もっと努力したい」「さらに工夫したい」などと、自身の学習の見通しを立てたり、合格点を取っているのに「もっと練習してパフォーマンス課題に再挑戦したい」と、自ら高い目標を掲げたい様子を紹介されています。

パフォーマンス課題を作成する際には、適切な単元を選び、「本質的な問い」や「原理や一般化」についての「永続的理解」を教科内で言語化する必要がありますから、初めてパフォーマンス課題を実施する時は少々苦労を感じるかもしれません。しかし、多くの先生方は、「パフォーマンス課題を実施してみたことで、本校の生徒はここまでできるのだと分かり、感動した」と、苦労に見合った喜びを語ります。「実践事例1」北海道札幌南陵高校(P.6～9)では、音楽の授業において、評価規準を生徒に明示した上で、レポートに



よるパフォーマンス課題を繰り返し実施することで、生徒の理解を長期的に深めています。

また、パフォーマンス課題の作成には、「本質的な問い」や「原

## 4 ルーブリックとは

### パフォーマンス課題での 取り組みの質を評価する

パフォーマンス課題での生徒のレポートや作品の評価は、客観テストのように正解・不正解という形で判定できるものではなく、一つひとつの取り組みの質を吟味する必要があります。パフォーマンス課題での取り組みの質を判断する基準表がルーブリックです。

ルーブリックは、評価する観点（規準）と、その到達の度合いを示す数レベル程度の尺度（基準）と、それぞれの基準に対応するパフォーマンスの徴候を記した記述語から成ります（図5）。

ルーブリックの1つに、特定の

理や一般化」についての「永続的理解」という暗黙知になりがちだった事柄を先生方が共有することで、教科の指導力が向上するというメリットもあります。

課題から生み出された作品について、その質を吟味するための規準・

基準を明示する「特定課題ルーブリック」があります。先生方が各単元でのパフォーマンス課題で用いるのは、特定課題ルーブリックであり、生徒に対して、評価者である教師が、何を、どんな点で評価するかを明示するものです。

特定課題ルーブリックを用いた質的な評価は、客観テストなどによる量的な評価と異なり、専門家を持つ「鑑識眼」を基盤として行われるものです。ルーブリックの作成では、教師同士の対話が不可欠ですが（図6）、その営みは、指導観の共有や同僚性の涵養にもつながることが期待できます。

図5 ルーブリックの構成

レベル	A	B	C	
評価規準 (観点)	<b>実行可能で検証可能な課題を設定している</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>実際に実験をした上で、さらに追究すべき適切な問いと仮説を立てている</li> <li>先行研究がある場合、比較できるような課題を設定している</li> </ul>	<b>研究の目標を踏まえた課題を設定している</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>実際に実験で検証できるような問いを立てている</li> <li>研究を通じて明らかにしたい目標や仮説を書いている</li> </ul>	<b>課題を設定することができていない</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>問いが曖昧で、具体的に何をしたらよいか明らかになっていない</li> </ul>	基準 徴候

※西岡教授への取材を基に編集部で作成。

ルーブリックは、学習者に対して、基準に到達した状態を具体的に伝えるものでもあります。そのため、ルーブリックで単に生徒の姿を文章で記すだけでなく、そのレベルに対応した具体的な生徒の

図6 ルーブリックの作成手順の例

- 1 パフォーマンス課題を実施し、学習者の作品を集める。
  - 2 ぱっと見た印象で、「5 素晴らしい」「4 よい」「3 合格」「2 もう一歩」「1 かなりの改善が必要」という5つのレベルで採点する。複数人で採点する場合は互いの採点が分らないように工夫する（評点を付箋紙に書き、作品の裏に貼りつけるなど）。
  - 3 全員が採点し終わったら、付箋紙を作品の表に貼り直し、レベル別の作品群に分ける。それぞれのレベルに対応する作品群について、どのような特徴が見られるのかを読み取り、話し合いながら記述語を作成する。
  - 4 ひと通りの記述語ができたなら、評価が分かれた作品について検討し、それらの作品についての確に評価できるように記述語を練り直す。
  - 5 必要に応じて評価の観点を複数に分けて、観点別ルーブリックにする。
- ※グラント・ウィギンズ『Educative Assessment』(Jossey-Bass Publishers)の内容を基に西岡教授が作成。

作品（アンカー作品）を添付すると、生徒はさらに目指すべき状態がイメージしやすくなります。

ルーブリックは、パフォーマンス課題に取り組んだ生徒の姿を基に練り上げられてこそ、自校の生

徒の実態に合った評価規準・基準となっていくきます。言い換えれば、ルーブリックができて、パ

## 5 評価計画の立て方

3 観点をどの単元で  
何を使って評価するか

各教科において、どの単元でどの評価方法を用いるのか、指導計画と合わせて検討します(図7)。「知識・技能」は筆記テストと実技テスト、「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」はパフォーマンス課題で一体的に評価することを基本とすると、3観点をバランスよく見取ることができ、筆記テストや実技テストの実施にあたっては、評価項目を並べたチェックリストで評価規準を定めた上でテストを作成し、達成率で成績をつけます。パフォーマンス課題の実施にあたっては、ルーブリックに基づいて評価を行います、単元を超えて類似の課

パフォーマンス課題が十分に実施されていなければ、生徒を適切に評価することは困難です。

題を繰り返し与えて、長期的ルーブリックを用いて生徒の成長を評価することも可能です。

図7 学習評価計画の立て方の例

観点	評価方法	単元1	単元2	単元X	単元Y
主体的に学習に取り組む態度	パフォーマンス課題		○		◎
思考・判断・表現					
知識・技能	筆記テスト/ 実技テスト	◎	◎		◎

※○が指導する観点、◎が評定に結びつける観点を示す。  
※西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計』(図書文化)より。

なお、3観点すべてを各単元で評価しなければいけないわけではありません。年間指導計画を見通しながら、それぞれの観点を評価しやすい単元、タイミング(授業、定期考査、発表会など)を考え、評定に結びつける機会を明確

## 6 22年度に向けて、先生方への提案

パフォーマンス課題を実施し、  
評価を持ち寄る

まず、各教科で1つ、パフォーマンス課題を実践してみることをお勧めします。生徒のレポートや作品に対する先生たちの評価を持ち寄り、ルーブリックを作っていくことで、観点別評価に対する理解が深まりますし、各学年でパフォーマンス課題の作成に取り組むことで、校内の知見が積み重なります。

また、探究学習などで作成しているポートフォリオを見ながら、課題と今後の取り組みについ

にすることで、先生方が「評価疲れ」することのない評価計画になると思います。そして、図7の○印のような評定に結びつけない評価は、指導と学習の改善に生かす形成的評価として活用していくとよいでしょう。

て、生徒と1対1で対話することで、生徒が設定した探究課題の質や資料の収集力、論理性などを評価する先生方の力が向上するはず。そうした力は、探究学習はもちろん、教科の授業の評価の改善にも必ず役立ちます。

観点別評価は、予測困難な社会で幸せに生きていくためにどのような資質・能力が必要かを、生徒と教師が共通理解する機会でもあります。観点別評価の充実、生徒にとって、高校での学びの意義を認識するだけでなく、大学などでの学びを見通すことにもつながるはず。